

井沢元彦

修道士の首

織田信長推理帳

社文庫
講談



しやうどうし くび
修道士の首

いざわもとひこ
井沢元彦

© Motohiko Izawa 1987



講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

昭和62年3月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。 (庫一)

ISBN4-06-183940-3 (0)



講談社文庫

修道士の首

井沢元彦

講談社

目次

修道士の首

二つ玉の男

六点鐘は二度鳴る

王者の罪業

身中の虫

不動明王の剣

裁かれたアドニス

解説

新保博久

五

三三

六三

九

一三五

一五九

一九七

二五四

修道士の首
イルマン

わたくしでございますか？ わたくしは前右大臣織田信長様の御城下安土にある神学校で、神にお仕え致しております修道士でございます。

安土は美しい町でございます。

都から十四レーグア（里）東の、琵琶湖のほとりにあり、安土城を中心に整然とした町並みが続いております。御城は信長様が三年の月日をかけ天下の名工を集めて築かれた、それは見事なもので、春の風やわらかなころ五層七重の天守が近くの西の湖の水面に写るさまは、まさに地上の樂園を思わせるものがございました。われらが師ルイス・フロイス様も、安土の町を日本で最も気品があり、位置と美観と建物と住民の気高さにおいて他のあらゆる町を凌駕している——とローマへ報告されております。町は長さ二十レーグア、幅が二ないし三レーグアで、信長様の楽市楽座の方針のためか商業がさかんでございます。もちろん天主の教えも信長様の庇護のもと、信者が増えてきております。安土セミナーオは城下の南の下豊浦というところの埋立地にございますが、当初は敷地も狭く教会の三階をセミナーオとして使っておりました。校長は司祭オルガンティーン様で、ラテン語の教師にカリオン神父、メスキータ神父がおられます。またセミナーオでは音楽も希望者に教授することにしておりまして、オルガンやクラヴサン（チェンバロ）やハープなど、美しい音色が安土の町に流れるようになったのでございます。

信長様はことのほか西洋の音楽がお気に召され、よくセミナリオに演奏をお聞きにいらっしやうたものでした。

最初におみえになったのは、確か、主イエス・キリストの生誕より千五百八十年目（天正八年）の十一月、ちょうど万聖節の二日後でございました。わたくしどもはその日、いつものとおり朝五時半に起きミサと朝のお祈りをすませラテン語の学習を行なっております。わたくしは、一年ほど前に法華宗から改宗し熱心な信者となったシメオン修道士にラテン語の手ほどきをしておったのでございます。

わたくしとて改宗者でございませうからラテン語が自由に使えるわけではございませぬ。しかし、初歩の初歩ぐらいなら何とかわかりますし、この程度のことでもカリオン様やメスキータ様のお手をわずらわせるわけには参りませぬ。デウスの教えを奉ずる者にとってラテン語の学習は欠かせませんので、シメオン殿は熱心な生徒でした。

祈りの言葉を唱えるのも、聖歌を歌うのも、ラテン語が基本でしたし、なによりシメオン殿は直接自分の手で聖書ブルガタを読みたいというのが大きな望みであつたようで、その進歩の早さはおどろくべきものでした。

邪教ながらも法華宗と申しますのは他の仏教宗派と比べても戦鬪的で異常な熱心さがございませぬ。シメオン殿に申しわけないが、あるいはそれが今になって幸いしているのかもしれない。たとえば十一年前京の都で、フロイス様と朝山日乗ちやうざん にちじやうと申す法華宗の僧とが信長様の前で宗論を戦わしたことがありました。

京の妙覚寺での宗論は、信長様や多数の諸侯の立ち合いのもと、フロイス様とローレンソ修道士が出席、法華宗側はあの日乗がまるで軍鶏しやものように目を光らせいまにも飛びつきそうな顔であらわれたのでございます。殿の御前でお二人は神デウスの救いと恩寵おんちゆうをお説きになり、日本の神や仏は所詮しよせん只の人であり人々を救済することなど出来ぬと主張なさいました。これに対し日乗は唇を噛み、齒軋はざしりし、激怒のあまり殿の御刀を奪って、

「この刀で殺してやる。もし靈魂があるというなら見せてみよ」

と無法にもローレンソ修道士に切りつけようと致しました。そこで信長様は日乗を取り抑えさせ、

「日乗、汝なんじがなすべきは武器を執とることに非ず。根拠をあげ教法を弁護すべし」とお叱りになったのでございます。

結局、この宗論は法華宗側の負けとなり、のちに、日乗は野垂れ死にをし、殿はますますわれらキリシタンに好意的になられたのでございますが、法華宗の仏僧ボツソウどもは、その後も悪行改まらず、たびたび根も葉もない流言を飛ばし布教を妨害して参りました。魔法使い、天狗の手先等々、仏僧どもの虚言のため迷惑したと教知れませぬ。しかし信長様の思おぼし召めしでセミナリオが開校されてからは、徐々ではありますがキリシタンに対する誤解や偏見がなくなってきたのも事実でございます。かつては邪教の熱心な信者であったシメオン殿が改宗され模範的な修道士となられたのも、そのあらわれでございましょう。

やせぎすで頬骨の出たシメオン殿とわたくしが、ラテン語の学習にひとくぎりをつけ、そろそ

ろ食事をとろうかと思ひ始めたころ、突然、信長様がセミナリオにお出ましになったのでございます。わたくしどもは大慌てでお迎えに走りましたが、殿は二階の祭具や十字架には目もくれず、まっすぐに三階へ登ってこられました。付き従うのはわずか五人、いずれも若い近習の方々で、中の一人は森蘭丸殿とおっしゃいまして御年十六歳におなりになる花も恥らう美少年でございました。

信長様は、フロイス様の表現を借りれば、中くらいの背丈、華奢な体軀で、鬚は少なく、声は快闊、きわめて戦を好み、名誉心に富み、正義に厳格な方でございます。鷹狩り馬責めなどが好きなわりには、青白く鼻筋の通ったお顔をお持ちです。御年は確か四十七歳と漏れうけたまわります。

信長様は西洋音楽が大変お気に入り、まっすぐ三階にあがられたのも、色々な楽器が三階にあることを御存知だったからでしょう。信長様はオルガンやヴィオラやハーブに手を触れられ、子供のように目を輝やかせていらっしやいました。オルガンティーノ様が歓迎の言葉を述べられると、信長様はみなまで言わず、

「パードレ、弾いてみせい」

とお命じになりました。

司祭様は手を打って楽器の演奏の巧みな者四人を呼びよせ、オルガン、ヴィオラ、ハーブそれにクラヴサンにそれぞれつかせて、グレゴリオ聖歌の一節をお聞かせしました。

殿は目を閉じて御満悦の様子でしたが、ひととおりお聞きになると、楽器の構造に興味をもた

れ司祭様に色々御質問されました。特にその日、殿の興味を独占したのはイスパニアから到着したばかりのクラヴサンでございました。殿はクラヴサンの外蓋を開かせ金属の絃が張つてある内部をしげしげと御覧になりました。つくづく好奇心の旺盛な方でございます。

ところでクラヴサンを御存知でしょうか？ パードレの中にはチェンバロとお呼びになる方もいらつしやるようですが、この楽器は木製の箱の中に琴のように張りめぐらした鉄製の絃を、横一列に並んだ鍵盤を押して、その先についている鳥の羽根軸や爪で引っかけて音を出すもので、強いて言えば日本の琴に似た音色をしております。信長様もオルガンと同じような鍵盤を使う器でありながら、音色がまったく違う点に深い興味を抱かれたのでございましょう。内部の構造を御覧になりながら、鍵盤を押させ、先の部分の爪が絃を下から上へ弾くさまを眺めて嬉しそうな表情をお見せになりました。

「お蘭、見るがよい」

と鍵の動きに合わせて、指で鉄の絃を弾いて音を出すさまは、とても天下人とは思えない無邪気さでございます。

お蘭と呼ばれた森殿も、シメオン殿も、クラヴサンの内部を見るのははじめてなのでしようか、ひたすら殿の指先を見守っておったのでございませう。

信長様はさらに一曲、クラヴサンだけの演奏を所望されましたので、演奏者の修道士ヘルナンデスは見事な手さばきで讚美歌をお弾きになりました。カンティガというマリア様の讚歌のよう

ヘルナンド様はイスパニア生まれの若い修道士で、湖を思わせるような透き通った青い瞳と黄金の髪をお持ちで、初めて安土の町衆に姿をお見せになった時は、その見事な頭髪がひとしきり町の噂になったものでした。無知な町衆の中には、砂金をまぶしているのではないかと、ヘルナンド様の髪の毛を欲しがる者が少なくなかったと申します。

「見事じゃ、気に入ったぞ」

と信長様はヘルナンド様に用意の銀子をお与えになりました。ヘルナンド様は殿の御機嫌がよいのを幸い、受洗される意志がないかとお尋ねになりました。信長様はキリシタンの庇護者ではありませんが、御自身は信者ではなく、わたしどもは何度も洗礼を受けることをお勧めしていたのでございます。しかし、信長様はその時も、笑ってお答えにはなりませんでした。

二

とんでもない事件が起こったのは、八ヵ月ほどのちローマからの巡察使ヴァリニャーノ様が安土に御滞在中のときでした。

突然、ヘルナンド修道士が行方知れずとなったのです。その前夜ヘルナンド修道士は、オルガンティーンノ様、ヴァリニャーノ様それにシメオン殿やわたくしと一日の反省と祈りをささげ寝床に入った筈はずでした。ところが五時半の朝の祈りにも姿を見せず、寝床はもぬけのから。外出の心当りもありません。もちろん外泊するような方でもありませんので、一同何かヘルナンド様の身

に交事があったのではないかと八方手を尽くして探しました。しかし杳うちとして行方は知れず、不安に苛さいなまれた顔が礼拝堂の中に並ぶ次第となりました。

「行先について心当りはないか？」

こうお尋ねになったのはオルガンティーンノ様でございました。誰も答えません。こんな場合は、信者のところへ行っている間に何か不都合があったのではないかと考えるのが普通のようにでございしますが、たとえそうだとしても、ヘルナンド様は平素から心がけがよい方で何らかの連絡をしてくる筈なのでございます。行先も告げずにいつの間にかいなくなったのは、まったく初めてでございました。もしや異教徒に襲われたのでは、いやいや悪い女に引っかけたのでは——など想像は悪い方へ悪い方へと進みました。

沈黙を破ったのはシメオン殿でした。

いかにも言いにくそうにシメオン殿は驚くべきことを語り始めました。ヘルナンド様が最近信仰に疑いを持って悩んでいたというのです。

「——果して神の救いなどがあるのだろうか、もし、その有無を知ることができるなら、悪魔サタンに魂を売ってもよい。そう話しておいででした」

シメオン殿がそう言うと、オルガンティーンノ様は信じられないように首を振り、

「なぜ、わたしに相談しないのだ。なぜだ？ あの気持のいい若者が……」
と絶句なさいました。

「——とても恐しくて相談できなかったのでしょうか。わたくしにも、ふとお漏らしになったの

ですから」

オルガンティーノ様は激しく衝撃を受けられた御様子で、頭を抱え込んだまま椅子に座り込んでしまわれました。それを見て、ヴァリニャーノ様は胸のロザリオをまさぐり、一同に向つて、「ヘルナンドの無事を神に祈りましょう」

と声をかけられました。

しかし、その祈りは空しかったと言ふべきでございましょうか、その日の午後からでございませぬ、城下に、金毛天狗の噂が流れるようになりましたのは。

城下の辻々に金毛碧眼黒カッパの男が現われ、人々に悪さをしかけるといふ噂でございませぬ。ある者は突然眼の前に現われた金毛天狗に、殴られて財布を奪われたと申します。またある女は着物に墨をかけられ、ある子供は遊びの独楽を取り上げられるなど、その日を境に頻々として被害が出始めたのでございませぬ。その金毛天狗なるものは、金髪に腫は青く全身黒づくめの服装で、ピロードのカッパを着ているといふ噂でした。当初は馬鹿げた噂として無視していたわたしどもでしたが、こうも被害が続出すると考えずにはいられなくなりました。すなわち、金毛天狗とはヘルナンド様の仕業ではないかといふこととございませぬ。

ヘルナンド様の温厚で篤実な性格からみれば有り得ない筈のこととございませぬが、金髪で青い眼の人間はざらにはおりませぬうえ、修道士の服装といふのは御存知のように黒づくめなのでございませぬ。

事態を重く見たオルガンティーノ様の命令で、わたくしどもは手分けして町中を探しました。

何しろ傍目には異様な風体でございますので、そうそう隠れるところがある筈はございません。ところが、どこを探しても見付からないのでございます。一同日々のお勤めもままならぬ有り様となりました。さらに悪いことは金毛天狗が伴天連の魔法使いだという根も葉もない噂が市中に流れたことでございます。このために、わたしどもが町を歩くと罵詈謗や小石までが飛んでくるようになりました。

ヘルナンド様が姿を消して三日目の夕方、わたくしが探索から戻って参りますと、オルガンティノ様が額から血を流していらつしやるではありませんか、わたくしは慌てて駆け寄りました。「パードレ、どうなさったのです？」

「——案じてはなりません」

とオルガンティノ様は微笑を浮かべておっしゃいました。わたくしはとりあえず血止めをし、包帯を巻いて手当を致しました。

「町の衆が石を投げたのですね？」

わたくしは憤慨して言いました。オルガンティノ様はわたくしの興奮をたしなめるように、「迷える小羊たちが誤解をしたのです。恨んではなりません」

とそれ以上の追求を封じました。

おり悪しく、そこに遠乗り帰りの信長様がお見えになったのです。いつものように蘭丸殿をはじめお供は数人でした。

「パードレ、額の傷はどうしたのだ？」